熊朋来の古韻学（一）

富平美波

1．はじめに

多くの音韻学史や中国語学史の著作が指摘するように、宋代になると本格的な古韻学の萌芽が芽生え、専門の古韻学の著作が現れ始めたが、それらの著作の多くが現存していない。完全に残っているのは呉棫の『韻補』であるが、呉のもうひとつの重要な著作であったと思われる『詩補音』は失われていて、呉の学説を継承したといわれる朱熹の『詩集伝』を参照しなければならず、しかもそれはあくまでも朱子の著作であって、呉の説そのものを反映しているとは限らない。項安世の『項氏家説』の一部には項の古韻に対する見解が述べられているが(1)、『家説』は古韻学に関する専著ではない。程迥の『音式』も伝わらず、その内容については、「四庫全書総目提要」（巻四二、経部、小学類三）の「韻補」の条に、「自宋以来著一書以明古音者、実自棫始、而程迥之音式継之。迥書以三声通用、双声互転為説。所見較棫差的、今已不伝。」とあることしか手がかりがない(2)。鄭庠は『古音辨』を書いて、古韻を6部に分けたと伝えられるが、『古音辨』そのものは伝わらず、戴震の『声韻考』や夏炘の『詩古韻表二十二部集説』の中にその分部のあらましが紹介されているのみである。

さて、この鄭庠の学説に言及する著作に、ほかに元の熊朋来の『熊氏経説』（また、「五経説」とも言う。『通志堂経解』・『四庫全書』所収。）がある(3)。同書の巻二、「易詩書古韻」の条で、鄭の説のいくつかを引用しつつ、批判を加えているのがそれである。熊は、鄭の見解の紹介のみに終始しているのではなく、呉棫や朱熹の説も参考しつつ、自身の考えを述べているのであって、熊が古韻について抱いていた考えの一端を窺い見ることができる。本稿では、この『熊氏経説』から熊朋来の古韻学の内容とその特徴をまとめてみようとするものである。

熊朋来は、豫章の人で、字を與可といい、南宋の咸淳甲戌（10年、1274）の進士であったが、のち元に入って学問をもって知られ、元の学政に協力した。元の英宗の至治年間（1321-1323）に78歳で逝去している(4)。現存の著作には『熊氏経説』のほか、『四庫全書』や『指海叢書』に収められている『瑟譜』がある。

本稿では、『通志堂経解』本の『熊氏経説』を使用したが、『熊氏経説』の中で、内容が（やや広い意味で）古韻学に関わる記述が現れるのは、管見のところで、次のような条がある。

巻一　「襍卦錯簡」

「読易荅問」(「或問漸之九三……」の段)

巻二　「易詩書古韻」

「皐陶明畏明威」

「五紀以後錯簡、須別録出、方可読」

「商頌」

巻四　「保氏六書」

「漢儒於礼経輒改某字読作某音」

巻六　「礼記引詩」

巻七　「評篆」

「評韻釈」

但し、最もまとまっているのは「易詩書古韻」の条であるので、本稿では、まず、「易詩書古韻」の条の内容を詳しく紹介し、次に他の条に現れる熊の見解の特徴的な部分を取り上げてゆくことにしたい。なお、内容と印刷の都合上、稿を（一）と（二）に分け、本稿「熊朋来の古韻学（一)」ではもっぱら「易詩書古韻」の内容について検討し、続稿「熊朋来の古韻学（二)」においては、『熊氏経説』のその他の条の内容を中心に、『詩経』以外の経書の押韻や、諧声系列、『詩経』の異文、漢代の学者の音注などに関する熊の見解について検討を加えて行く予定である。

2.「易詩書古韻」について　その一：第1段　古韻研究総論

「易詩書古韻」の条は、『通志堂経解』本・『四庫全書』本の段落分け（行換え）に従えば計8段からなるかなり長い文章である。そのうち、第1段では、古韻学の方法や古韻の研究の歴史などについて総論的なことを述べ、第2段以後で、呉棫・鄭庠の説の批判をしながら『詩経』の押韻の具体例を取り扱っている。以下、この8段の内容を段ごとに順次に見てゆくこととしたい。まずこの章では、総論的な第1段を取り上げる。

第1段の内容は3つに分かれると思われる。最初の部分では、以下に引用するように、熊は古韻の解明の可能性とその資料について述べている。

「古人用韻可以見当時字音之正。書賡歌、易爻辞、彖象伝及風、雅、頌之韻可参考而互証。……。(中略)……。以易書證於詩古韻、歴歴可考。下至楚辞、参同、太玄、歴漢魏晋宋斉梁陳有韻之文尚存古音。韓杜之詩猶有存者。」〔古人の押韻から当時の字音の正しい姿を窺い見ることができる。『書経』の「賡載歌」や『易経』の「爻辞」・「彖伝」・「象伝」、及び『詩経』の「国風」・「小雅」・「大雅」・「頌」の押韻は参考になるし、互いに証明し合わせることもできる。……。(中略)……。『易経』や『書経』の押韻について『詩経』の古韻に裏付けを取ると、い

ちいち明らかに参考になる。時代が下って『楚辞』や『参同契』・『太玄経』、漢・魏・晋・宋・斉・梁・陳代の韻を踏んだ文にも古音を保存しているものがある。韓愈や杜甫の詩にもなお（古音を）保存しているものがある。〕

ここには、『詩経』のみならず、『易経』・『書経』の押韻部分、ひいて後世の韻文や詩のなかにも古韻研究の参考になる押韻現象が見られることが述べられている。唐代の詩人の詩の一部までも含むのは、現在から見れば時代錯誤であるが、古韻に一致する特徴を表す資料は広く参考に供することを辞さない態度であって、後世批判を受けた呉棫の『韻補』の方法と同じものである。また、ここには『詩経』を第一の資料に据え、その他の資料は、経書も含めて、それを傍証する副次的資料として扱うという考えがほの見えるように思われる。それは言うまでもなく、明の陳第が『毛詩古音考』で採用して後の賞賛を勝ち得たやり方である。

なお、文中「中略」とした部分には、古韻学の資料となりうる『書経』の押韻例が列挙されているが、それらの押韻例については続稿において扱うこととしたい。

次の部分では、『経典釈文』や「唐韻」の流行を通じて、古韻が正しく世人に知られなくなったことを述べる。

「自釈文行世、韻略試士、俗儒執唐韻為證、正音始尽廃。古韻詩音旧有九家、陸徳明以己見定為一家之学。開元中修五経文字、我心慘慘、書慘為懆(5)、音七到切、伐鼓淵淵、書淵為鼛(6)、淵音於巾切、皆不従釈文。徳明之学唐人亦未尽信也。詩中慘皆作懆、乃協。労心懆兮協照紹燎為韻。我心懆懆協亦聿既耄為韻。歌以訊之当従歌以誶止。是用不集当従是用不就。皆以韻為證。釈文猶或字具数音、及孫氏直音出、而挾兎園冊者併釈文、不復考矣。」〔『経典釈文』が世に行われ、科挙に『韻略』を用い(7)、見識の低い学者が『唐韻』を証拠に用いるようになってから、正音はまったく廃れ始めた。古韻に従う『詩経』の読音はもともと9家が伝えていたが、陸徳明が自分の見解に基づいて、独自の学問をうちたてた。（唐の）開元年間に五経の文字を修訂したとき、「我心慘慘」（『詩経』「大雅」「抑」第11章第4句）の「慘」を「懆」と書いた(8)。音は「七到切」である。また、「伐鼓淵淵」（『詩経』「小雅」「采芑」第3章第11句）の「淵」を「鼛」と書いた(9)。音は「於巾切」である。どれも『経典釈文』の見解に従っていない。唐代の人も陸徳明の学問をことごとくは信じていなかったのである。『詩経』の中の「慘」はみな「懆」に作ると、韻が調和する。「労心懆兮」（『詩経』「陳風」「月出」第3章第4句。現行「毛詩」は「労心慘兮」に作る。）は、「照」・「紹」・「燎」（「月出」第3章　第1句～第3句の韻字）と調和して韻を踏む。「我心懆懆」（「抑」第11章第4句）は「亦聿既耄」（第10句）と韻を踏む。「歌以訊之」（『詩経』「陳風」「墓門」第3章第4句）は「歌以誶止」に従うべきである。「是用不集」（『詩経』「小雅」「小旻」第3章第4句）は「是用不就」に従うべきである。これらはみな韻から証明できる。『経典釈文』はそれでもまだ時に1字に数種類の読音を記録しているが、孫氏の直音(10)が出てから、通俗の参考書が『経典釈文』の読音を

併合してしまい、それ以上考証がなされなくなってしまった。〕

熊が、『経典釈文』をはじめ、経書の注釈に現れるような後漢以来の学者の読音をあまり評価せず、古韻の考証に積極的に活用する姿勢も見せていないのは、『熊氏経説』の他の条の記述からもうかがえることである。また、『詩経』の異文に基づいて、韻が合うように『詩経』の本文を校訂し、陰・陽或いは陰・入両類にまたがる特殊な押韻を解消してしまうのは、一つの見識として評価することができる。上記のような詩篇において「慘」・「訊」・「集」を「懆」・「誶」・「就」に校訂するのは、現代の学者では王力がこれに従っている。呉棫の『韻補』は、「慘」と「訊」を取り上げているが、いずれも見出し字は「慘」・「訊」のままで、それぞれ「七到切」・「息悴切」の音を付けるにとどまる。朱熹の『詩集伝』は、「抑」・「月出」の「慘」については「当作懆」とし、校訂する意志がはっきりしているが、「小旻」の「集」については「韓詩作就、叶疾救反」とするのみであり、「墓門」の「訊」については、「訊、叶息悴反」と協韻を付けるにとどまっている。熊の言う「作る」・「従う」を『詩経』の本文を校訂する意味だととれば、熊は両者に比べて、テキストを改める意志がよりはっきりしているということができる。これは、『熊氏経説』巻六の「礼記引詩」の条に見える、『詩経』の文字遣いの特色（歌詞の「音」を写し止めたという性質）についての見解や、巻二に見える、（押韻に合うように）『易経』や『書経』の一部に大幅な錯簡を認める見解とも関連する立場だと考えられる。

3番目の部分では、呉棫を初めとする古韻学の歴史について述べる。

「呉棫材老作協韻補音、鄭庠作古音辨。鄭与項安世各立韻例。呉鄭同時而朱文公詩伝止采呉氏協音、間亦改其繆誤、補其遺闕。鄭韻出於詩伝既成之後、呉鄭自不相識故、其説或未帰一。」〔呉棫字材老(11)は『協韻補音』(12)を著し、鄭庠は『古音辨』を著した。鄭と項安世は各自韻例を立てた。呉と鄭と同時に、朱文公（朱熹）の『詩集伝』は呉の協音説を採用するにとどまったが、ところどころ呉説の間違いを正したり、遺漏を補ったりしている。鄭の韻は『詩集伝』が既にできあがった後に出現したものであるが、呉と鄭はお互いに知り合っていなかったので、彼らの説はところどころ一致していないところがある。〕

熊はここに言及するような著作を見ていたのであろう。鄭庠と項安世がそれぞれに「韻例を立てた」というのは、後の第7段での「韻例」の語の使用状況から推定して、古韻における韻の調和のしかたに見られる規則性の発見、中古音の韻を基礎にしながら古韻の分部に至る可能性を含んだ通押の通則を見いだしたということだと思われる。或いはそうではなくて、『詩経』の詩句の押韻字の位置、すなわち韻律を明らかにしたという意味かもしれないが、それならば、鄭のものは今では見るべくもなく、項安世のものは、『項氏家説』の巻四に「詩句押韻疎密」・「詩押韻変例」・「重押韻」などの条があって、彼の考え方の若干がわかる。また、ここに言及されたもののほか、「易詩書古韻」の第2段では、「程沙随」（すなわち程迥。字可久。沙随先生と称された。）の説に一部言及しているから、熊は程の学問についても知っていたものらしい。

3.「易詩書古韻」について　その二：第2～第5段　鄭庠の分部への批判

第2段以下は、鄭庠と呉棫、及び項安世、朱熹（『詩集伝』）らの説に対する批判を中心に展開するので、先に呉と鄭の分部のあらましを見ておくことにしよう。ここで気を付けなければならないのは、鄭や呉において厳密な意味で「韻部」という観念があったかどうか一概には決められないということである。彼らの分類は古韻において通韻可能な枠を示していることは確かであるが、なぜその枠の中で押韻がなされたり、それらの韻を関係づける音注が存在したりするのかについて彼らがどう認識していたかは、別に検討することが必要である。押韻のため一時的に、あるいは方言的現象として、字音が変化することがあったと考えていただけだという可能性もあるわけである。「協」や「通」・「転」という語の意味を彼らの著書が述べるところと照らし合わせて十分検討してみなければ答えは出そうにない。頼江基は『韻補』が「古通某」と注する韻のグループは合併して一部をなしていると考えてよいが、「転声通」とみなされた韻や「転声入」とみなされた文字はその部に属するのではなく、その部の音に改読されてのち韻が調和することがあるとされているにすぎないと述べている(13)。本稿では鄭や呉らの示すグループ分けをやはり「分部」と呼んでおいたが、これは中国の音韻学史について述べた書物などがそれらを「分部」と表現する一般的習慣に従ったものである。鄭の説については夏炘の『詩古韻表二十二部集説』が掲げている表を引用し、その各部の後に、それぞれ同じ韻部について戴震の『声韻考』と熊の『熊氏経説』（「易詩書古韻」の条）が記述したものを、（戴）・（熊）として加えておく。なお、夏炘の表記は「平水韻」の韻目を用いている。

一部　東冬江　　屋沃覚
　　陽庚青　　薬陌錫
　　蒸　　徳
　（戴）東冬鍾江唐庚耕清青蒸登並従陽韻
　（熊）東冬鍾江陽唐庚耕清青蒸登十二韻相通、皆協陽唐之音

二部　支微
　　斉佳
　　灰
　（戴）脂之微斉佳皆灰咍並従支韻
　（熊）該当する記述なし

三部　魚
　　虞
　　歌麻

（戴）魚模歌戈麻並従虞韻

（熊）魚虞模歌戈麻六韻相通、皆協魚模之音

四部　真文　　質物

　　元寒　　月曷

　　刪先　　黠屑

（戴）真諄臻文殷元魂痕寒桓刪山仙並従先韻

（熊）貞(14)諄臻文欣元魂痕寒歓(15)刪山先仙(16)十四韻皆協先仙之音

五部　蕭

　　肴

　　豪尤

（戴）蕭宵肴豪侯幽並従尤韻

（熊）蕭宵爻豪尤侯幽七韻相通、皆協尤侯之音

六部　侵　　緝

　　覃　　合

　　塩咸　　葉洽

（戴）侵談塩添咸銜厳凡並従覃韻

（熊）侵覃談塩添厳咸銜凡九韻相通、皆協侵音

鄭の第二部についての熊の表現は見えないので明らかではないが、他の部について述べるところの体裁に従って言えば、「支脂之微斉佳皆灰咍九韻相通、皆協脂音」とでもなるであろうか。「皆協脂音」としたのは、止摂の音、すなわち戴震のいう「支韻」の音を代表させるのに「脂韻」を用いている例が「易詩書古韻」の中に見られるからであるが、むろん必ず上のようであったとは言いきれない。この部にはおそらく相配の韻を欠く去声の祭・泰・夬・廃4韻が含まれるであろうが、それが表現の中に登場したかどうかも明確ではない。

次に、呉の古韻九部について、許紹早が『中国古代語言学家評伝』の中で(17)まとめているものを引用しておこう。

一東　冬鍾古通東、江古通陽或転入東

二支　脂之微斉灰古通支、佳皆咍古転声通支

三魚　虞模古通魚

四真　諄臻殷痕青蒸登侵古通真、文元魂古転声通真、庚耕清古通真或転入陽

五先　仙塩厳古通先、寒桓刪山古転声通先、覃咸銜古通刪、談古通覃、添古通塩、凡古通厳

六蕭　宵肴豪古通蕭

七歌　戈古通歌、麻古転声通歌

八陽　江唐古通陽、庚耕清古通真或転入陽

九尤　侯幽古通尤

それでは、話がやや煩雑にはなるけれども、これから、「易詩書古韻」の第２段以下の内容を、順次に見て行くことにしよう。

〈第２段〉

第２段は、鄭の第四部に対する批判である。熊によれば、呉と鄭の説の異同は、「天」と「人」の２つの韻字をどう調和させるかという点に、顕著に現れているという。「天」・「人」は、上古音ではともに真部の字であったが、中古音では、「天」は山摂先韻に、「人」は臻摂真韻に入った。このように、上古の真部や文部において、中古の臻摂と山摂の字が同居しているのをどう扱うかは、当然古韻の研究の一つの課題になりうるわけである。さて、熊によると、呉は、「天」字をすべて、『集韻』の著録する音(18)を取って「鉄因切」とするのに対し、鄭は、「天」字の音には手を着けず、「人」字の音を「然」として、これに調和させる。そしてその傍証として、次のような後漢代の詩の押韻例をあげているという。

無名氏　古絶句四種の一(19)　山２　天４(20)　（鄭）山：音羶

鄭は、韻字「山」の音を「天」に合うように、山摂の洪音から細音に変えている。ちなみに、羅常培・周祖謨の『漢魏晋南北朝韻部演変研究（第一分冊)』によると、前・後漢を通じて「天」等の先韻の字はまだ真部にとどまっており、この「古絶句」の押韻例は、真部・元部合韻の例の中に上げられている。このように、同じ問題を解決しようとしながら全く逆方向の解決策を示している呉と鄭に対し、熊は、なかんずく鄭の考え方は融通性がなく、すべての押韻現象をとらえ切れていないと考えているようだ。熊は、「鄭氏の学問による人々が、もっぱら、貞(真)・諄・臻・文・欣・元・魂・痕・寒・歓・刪・山・先・仙14韻の字を、先・仙の音に調和させるのは、こだわりすぎであるように思われる（「則似拘矣」)。」と言った上、（１）のような『詩経』の例を掲げて、もし韻字が「天」と「人」の２字だけなら呉の説でも鄭の説でも解決がつくし(21)、（１）の『周易』の押韻例は鄭説でもあてはまるけれども、詩韻においては「天」字が貞（真)・寒・清・蒸等の韻と通押する例が多く、『詩』や『易』にはほかに（２）のような押韻例も存在していて、それらの例外を無視するわけにはゆかないと指摘している。熊は、挙例に際し全詩章の押韻字や音を全て明示しているわけではないので、以下には参考のために、清代に入り古韻の分部に対する見方が精密になった時期の代表として江有誥の『詩経韻読』を、熊に先行するものとして、朱熹の『詩集伝』（韻字の音注のみ）を引用しながら示すことにする。また、『詩経』以外の経書の押韻例については、江有誥の『群経韻読』を引く。以下の挙例において、江有誥の『詩経韻読』・『群経韻読』は（江）で、朱熹の『詩集伝』は（朱）で、熊朋来の採用する韻字及び熊の説は（熊）で、熊朋来の引用する鄭庠の説は（鄭）で示す。

（1）

『詩経』

1．鄘風45(22)柏舟1・2章　（江）天6：鉄因反　人7　真部　（朱）天6：叶鉄因反

2．王風65黍離1・2・3章　（江）天9：鉄因反　人10　真部　（朱）天9：叶鉄因反

3．小雅196小宛1章　（江）天2：鉄因反　人4　人6　真部　（朱）天2：叶鉄因反

4．小雅200巷伯5章　（江）天3－2：鉄因反　天3－4　人4　人5　真部　（朱）天3：叶鉄因反

5．小雅199何人斯3章　（江）人1　陳2　声3　身4　人5　天6：鉄因反　真部　合三句可作真耕通韻　（朱）天6：叶鉄因反

6．小雅193十月之交7章　（江）天6：鉄因反　人8　真部　（朱）天6：叶鉄因反

7．大雅238棫樸4章　（江）天2：鉄因反　人4　真部　（朱）天2：叶鉄因反

8．大雅239旱麓3章　（江）天1：鉄因反　淵2：一均反　人4　真部　（朱）天1：叶鉄因反　淵2：叶一均反

『周易』

9．上経「乾」文言伝「上不在天」～「中不在人」　（江）無韻　（熊）天　田　人

（2）

『詩経』

1．大雅235文王7章　（江）躬2：当是身字　天4：鉄因反　真部　（朱）躬2：叶姑弓反　天4：叶鉄因反　（鄭）躬2：音躳　（熊）躬2：音姑弘切　天4：鉄因切

2．頌　（熊）躬　年　出典箇所不明。

『周易』

3．上経「乾」文言伝「純粋精也」～「行而未成」　（江）：精　情　天　平　真耕合韻　（熊）精　情　天：鉄嬰切（？）　平　行　行　成

4．（熊）真　川　出典箇所不明。「同人」・「大畜」・「渙」・「中孚」の卦辞などで、「利涉大川」と「利貞」或いは「利君子貞」が接近して出てくる部分を指すか(23)。

「文王」7章の押韻例を、王力の『詩経韻読』は、江有誥のように韻字を校訂はせず、「躬」と「天」で「侵真合韻」とする。「躬」は中古通摂東韻三等の字で、上古中部（冬部とも呼ばれる）の字であるが、中部は侵部と関連が深いことから、王力はもと侵部の一部であったとして両部を合併させる。熊は「躬」に「姑弘切」、「天」に「鉄因切」の音を付ける方が鄭説よりも無理なく調和すると述べているが、中古登韻の音（-ng）と真韻の音（-n）とで韻が調和するとする立場なら、呉棫の古韻第四部と同じような行き方である。呉棫の『韻補』は現に「躬」に「姑弘反」という音を定めている。朱熹はこの「躬」を「叶姑弓反」としているが、「弓」は中古通摂東韻三等の音であるから、韻が十分調和しないように思える。この朱熹の協韻については更に検討を

要する。『周易』「乾」の文言伝の押韻例は、「天」のほかはすべて中古の梗摂の音ばかりであるから、熊には音が調和しやすいと見えたのであろうが、実は上古真・耕・陽3部の字が含まれていて、現在の目から見れば、たいへんゆるやかな韻字の取り方である。

熊はなぜ、「天」の古音を一種に固定するのを「とらわれすぎ」と考えたのであろうか。もちろん、それをはみだした押韻例が存在するからでもあるが、この第2段の終わりで「然声音之道変動周流、例有尽、而音無窮也」〔しかし、音はもともと変動し周流する性質のもので、その法則には限りがあるが、音は無限に生み出されてゆく。〕と言っているように、そもそも音がかなり変動しやすいものだと考えたからのようだ。熊は、鄭説ではとらえきれない押韻が行われる理由の一つの説明として、程迥が提唱したという「反紐通用」という考え方に従っている。これは、『四庫提要』が程の「双声互転」説と呼んでいるものと同じものかもしれない。熊によれば、「鉄因切」の音は「鉄煙切」にもなりえ、「鉄嬰切」にもなりうる、これすなわち「丁顛の反紐」であるという。この「丁顛」は『韻鏡』巻首の「帰納助紐字」と同じ文字遣いであって、このような音の転換が、自然な音韻現象に貫通する規則性でありうると考えられていたのであろう（24）。

熊が鄭の説を不自由であるとし、それでは捕捉しきれない押韻例があると考えたのは正しいであろう。鄭の分部は中古音の殻をうち破れず、そのため分部が大まかになり、各部の古音をとても単純に考えてしまった。後世、江有誥に「雖分韻至少、而仍有出韻、蓋専就唐韻求其合、不能析唐韻求其分、宜無当也。」〔韻の分け方がとても少ないのに、それでもその枠にあてはまらない部分が出てきてしまうのは、ひたすら唐韻に従って合わさる部分ばかりを求め、唐韻を分解してどこが分けられるかを追求しようとはしなかったからである。これでは結論が妥当でないのもしかたがない。〕（『音学十書』「古韻凡例」）と言われるのも無理からぬところがあるからである。しかし、それに対する熊の批評にもまた、後の目から見れば、いわゆる「古本音」に対する捉え方が甘く、一般的押韻と例外的押韻とを一律に説明しようとし、例外的押韻例を見いだそうとするあまり、韻字の認め方が放漫になっているなどの欠点があるのではなかろうか。この傾向は、続く第3段以下にも一貫して見られると思う。

熊は最後に、鄭よりもやや広い押韻の枠を認めている項安世の説を、「比鄭稍通」であるとして評価している。言及されているのは、項の「以青先貞（真）三韻為一例」と「以東蒸為例」という2説であるが、『項氏家説』の巻四「詩音類例」に述べられているものが、確証は得られないけれども、或いは熊が引くのと同様の説かと思われるので、『項氏家説』中の該当する表現と、そこで項が例に上げている『詩経』の押韻例とを以下に掲げてみよう。

1「青字先字真字三韻之聚為一者」

唐風125采苓1章　（江）苓1－2　苓1－4　巔2：徳因反　信4：平声　真部　（朱）巔2：叶典因反　信4：叶斯人反

2「詩音類例」に東・蒸韻のみから成る例はない。以下の二つが東と蒸を含む。

2.1「東字灰字蒸字三韻聚而為一者」

小雅168出車１章　（江）牧２：明逼反　来４：音力　載６：音稷　棘８　之部　（朱）牧２：叶莫狄反　来４：叶六直反　載６：叶節力反

2.2「蒸字之字尤字東字四韻聚而為一者」

小雅209楚茨１章　（江）棘２　稷４　翼６　億８　食９　祀10　侑11：音翼　福12：方逼反　之部　（朱）祀10：叶逸織反　侑11：音又、叶夷益反　福12：叶筆力反

１の押韻例は、韻字「苓」が上古真部から中古青韻に入った例外字で、結果-nと-ngにまたがる押韻があるように見えるものである。また2.1と2.2の押韻例から、ここで項が言う「東字」「蒸字」とは実は入声字、すなわち中古音で東韻に対応する入声屋韻と蒸韻に対応する入声職韻の字を指していることがわかる。つまり、古韻によく見られる現象であるところの、陰・入両声にわたる押韻を言っているわけである。夏炘の伝える鄭庠の分部が中古音と同じく陽・入相配であるのと同じような考えに基づいてなされた表現と思われる。熊がこれらの項氏の説を取り上げるのは、当然この段で述べた自説と関連する故であろう。例えば１は、先韻の字が「真・寒・清・蒸」等の韻と通押する例を項氏もまた見いだしていると考えたからであろう。２は、先の（２）の１や２の押韻例において東韻の「躬」字が「天」等の字と通押する現象が見えた故に、東韻と上記諸韻との関係を指摘している項説を引用したものであろうか。

〈第３段〉

第３段は、鄭庠の第一部が、中古音で-ng韻尾を持つ通・江・宕・梗・曾摂の字を１部にまとめ、一律に「陽・唐の音」に調和させている（戴震では「陽韻に従う」。）ことに対する批判である。熊によれば、それに符合しない現象が３点見られるという。

第１点は、古韻において、通摂と江摂とが関連し、むしろ通摂の音の方が古音としてふさわしいと思われる例があること。これは、上古音の東部・中部において、江摂の字が通摂の字と同部であり、宕摂の字（陽部）とは関連しないことを反映する現象である。熊の上げる例証は次の３つである。

１「降」字の音は「洪」である（鄭は古音「江」とする）。熊はこれ以上説明していないが、呉の『韻補』は「降」の音を「胡公切」とし、陳第の『毛詩古音考』は「音洪」としている。いずれも熊の考えと同じである。『毛詩古音考』の「本証」等から見て、裏付けとされる『詩経』の押韻例には次のようなものがある。

召南14草虫１章　（江）虫１　螽２　忡４　降７：胡冬反　中部　（朱）忡４：敕中反　降７：戸江反、叶乎攻反

小雅168出車５章　（江）虫１　螽２　忡４　降６：戸冬反　仲７　戎８　中部　（朱）忡４：敕中反　降６：戸江反、叶胡攻反

2「江」は「工」を音符とする諧声文字である。

3「曲江」が「曲紅」と書かれることがある。これについては、管見のところ出典未詳。

熊はここでも、後の第5段でも諧声系列を資料として利用している。諧声系列と古韻との密接な関係は、これよりさき宋の徐蔵が呉棫の『韻補』に寄せた序文の中にも述べられていることなので、熊にとって既知の知識であったとしても不思議はない。

第2点は、主として通摂と深摂とが関連することがあることを言う（熊の表現では「東侵二韻相通」）。これは、上古音において、中部と侵部とが関連が深いことから生じる現象である。また蒸部と侵部の合韻例においても登場する。熊が例証とする押韻例は次のようなものである。熊朋来がはっきり押韻字であると言っている字には《　》を付けて示しておく。

『周易』

1．下経「恒」象伝　（江）《深》　《中》　《容》　《禽》　終　凶　功　東中侵合韻

2．下経「艮」象伝　（江）《心》　《躬》　中　終　中侵合韻

『詩経』

3．大雅255蕩1章　（江）《諶6》　《終8》　中侵合韻　（朱）諶6：市林反、或叶市隆反　終：叶諸深反、或如字

4．大雅258雲漢2章　（江）虫2　宮4　《宗6》　《臨8》　躬10　中侵合韻　（朱）臨8：叶力中反

5．魯頌300閟宮5章　（江）乘1　滕2　《弓3》(25)　《綅5》　増6　膺7　懲8　承9　蒸侵通韻　（朱）乘1：繩証反、叶神陵反　滕2：徒登反　弓3：叶姑弘反　綅5：息廉反、叶息稜反

6．秦風128小戎3章　（江）群1　錞2：音純　文部　苑3：此句連上読作元文通韻、亦可叶音氳　膺4　《弓5》　滕6　興8　《音10》　蒸侵通韻　蒸十七侵十八故得通用　（朱）錞2：徒対反、叶朱倫反　苑3：叶音氳　弓5：叶姑弘反　滕6：直登反　音10：叶一陵反

7．邶風27緑衣4章　（江）《風2》　《心4》　侵部　（朱）風2：叶孚愔反

8．秦風132晨風1章　（江）《風1》　《林2》　欽4　侵部　（朱）風1：叶孚愔反

上の6の押韻例は、呉棫の古韻第四部に照らして考えれば、『詩集伝』では第1句から第10句までが一貫した押韻と見なされている可能性もある。

第3点は、通摂と遇摂の間の関連が見られることを指摘するものである。熊の挙例は次の「戎」字と「功」字の音である。

『詩経』

1．小雅164常棣4章　（江）侮2：経作務、今从左伝　戎4　無韻　（朱）務2：春秋伝作侮、罔甫反　戎4：叶而主反　（熊）戎4：読為汝

2．魯頌300閟宮２章　（江）武５　緒６　野８：音宇　（虞９：不入韻）　女10　旅11　父13　魯15　宇16　輔17　魚部　（朱）野８：叶上与反　女10：音汝　功12：叶居古　父13：扶雨反　子14：叶子古反　輔17：扶雨反　（熊）功12：読為古

１の例は、江有誥は『左伝』に従って校訂しながらなお無韻としているが、「務」・「侮」は侯部、「戎」は中部の字である。２のほうは、朱熹のような韻字の取り方をすると、東部の「功」が魚部の字と押韻していると認める結果になって、これは初期の研究の限界を示していると言えよう。熊は音を示すのみで、この部分の押韻についての考えを明確に示してはいないが、韻を調和させることが字音の推定の根拠になっていることは明らかであると思われる。したがって、熊は朱熹と同じようなとらえかたをしていると考えられる。１の「常棣」４章の押韻は後の第７段でも取り上げられているが、そこで熊は「戎」字の「汝」の音は「戎」の上声に調和したものだ（「協戎之上声」）と述べている。また２の「閟宮」２章の例は第１段においても『尚書』の韻との関連で取り上げられており、そこで熊は、「功字四声功古故刮、魯頌協功之上声為古」〔「功」字を四声に展開させると「功古故刮」となる。「魯頌」は「功」の上声に調和して「古」という音になったものである。〕と説明している。このことから熊朋来の脳裏においては入声韻は、陽声韻のみならず陰声韻とも相配でありえたことがわかる。

この第３段でも、熊は項安世の説を引用し、鄭より網羅的なものとして評価している。引かれているのは、上と同じく「詩音類例」によれば、次の通りである。

１（熊の表現）「以東蕭尤為一例」　（項の表現）「尤字蕭字東字三韻聚而為一者」

王風69中谷有蓷２章　（江）脩２　歎４：音脩　歎５　淑６：平声　幽部　（朱）修２：叶先竹反　歎４：叶息六反

２（熊）「東灰蒸為一例」　（項）「東字灰字蒸字三韻聚而為一者」　先の〈第２段〉２．１に同じ。

３（熊）「東侵為一例」　（項）「東与侵聚也」

邶風27緑衣４章　（江）風２　心４　侵部　（朱）風２：叶孚愔反

ここでも、１と２の例において「東字」とは、入声屋韻の字を指していると考えられるから、熊がもっぱら通摂の陽声韻について問題にしているのとそぐわないように見える。が、熊がここでなぜ項安世のこれらの説を引き合いに出しているのか理由はさだかではない。３はもちろん熊の第２点と関連している。

〈第４段〉

第４段は、鄭庠の第三部と第五部に対する批判である。鄭は、第三部では中古音の遇摂と果・仮摂の諸韻を一部にまとめ、すべて「魚模の音」に調和する（戴震では「みな虞韻に従う」）とし、第五部では、中古の效摂と流摂の諸韻を一部にまとめて、みな「尤侯の音」に調和する（戴

では「尤韻に従う」）と考えている。これに対し、熊は古韻に見られる次のような6点の現象がこれではとらえきれないとして批判を加える。

第1点は、遇摂と流摂を結びつける現象があること（熊の表現では「虞模与尤侯自可相通」）。これは、上古音の侯部で、中古音のこの2摂の字が出会うことをとらえたものである。押韻例について熊は詩篇名しか挙げていないがたぶん次の詩章であろう。

『詩経』

1．小雅163皇皇者華2章　（江）駒1：孤𦍒反　濡2：汝𦍒反　駆3：音𦍒　諏4：音緅　侯部　（朱）駒1：恭于恭侯二反　濡2：如朱如由二反　駆3：虧于虧由二反　諏4：子須子侯二反

2．鄭風80羔裘1章　（江）濡1：汝𦍒反　侯2　渝4：喩𦍒反　侯部　（朱）濡1：叶而朱而由二反　侯2：叶洪姑洪鉤二反　渝4：叶容朱容周二反

朱はこれらの叶音を遇摂の音とも流摂の音とも定めかねているのが明らかである。熊も「虞模が尤侯と自ずと通じ得る」とするのみで読音をどうしようとしているのかさだかではない。ここではむしろ、熊が押韻例だけでなく、当時の人の「語音」で、「謀」が「模」と、「侯」が「胡」と、「鄒」が「朱」としばしば近くなっている現象が見られると指摘していることが興味深い。今時の方言の中に古音のなごりを捜し出そうとする方法は、学者たちにしばしば試みられる方法である。もっとも、熊の場合は、生きて動く語音のうちに自然な音の転化の道筋を見いだそうとするのが主眼かもしれない。

第2点は、果・仮摂と止摂をつなぐ例があることである（熊の表現では「歌麻脂之韻相通」）。これは、上古の歌部の字の一部が中古の支韻に入っていることから現れる現象である。これについて熊は「儀」・「為」の2字を例証として上げるのみで他に何も説明していない。が、2字に対する『韻補』・『毛詩古音考』の音注と、『毛詩古音考』が「本証」として掲げている『詩経』の押韻例を上げれば次のようであって、熊も彼らの結論と同じような見解にたどりついていた可能性がある。

儀　『韻補』：牛何切　『毛詩古音考』：音俄

1．鄘風45柏舟1章　（江）河2　儀4：音俄　他5　歌部　（朱）儀4：叶牛何反　他5：湯河反

2．小雅176菁菁者莪1章　（江）莪1　阿2　儀4：音俄　歌部　（朱）莪1：五何反　儀4：叶五何反

3．大雅247既醉4章　（江）何1　嘉2：音歌　儀4：音俄　歌部　（朱）嘉2：叶居何反　儀4：叶牛何反

4．大雅256抑5章　（江）儀5：音俄　嘉6：音歌　磨8　為10：音譌　歌部　（朱）儀5：叶牛何反　嘉6：叶居何反　為10：叶五禾反

為　『韻補』：五禾切　『毛詩古音考』：音譌

1．鄘風52相鼠１章　（江）皮１：音婆　儀２：音俄　儀３　為４：音譌　歌部　（朱）皮１：叶蒲何反　儀２：叶牛何反　為４：叶五禾反

2．王風70兎爰１章　（江）羅２　為４：音譌　罹６：音羅　吪７　歌部　（朱）為４：叶五禾反　罹６：叶良何反

3．鄭風75緇衣１章　（江）宜１：音俄　為２：音譌　歌部　（朱）音注なし

4．大雅256抑５章　「儀」の４に同じ

第３点は、遇摂と仮摂をつなぐ例が存在することである。これは、中古の麻韻の一部の字が上古の魚部であったことによって現れる。熊は次の押韻例を上げている。

『詩経』

1．召南25騶虞１章　（江）《葭１》：音姑　《豝２》：音逋　乎３－３　《虞３－５》　魚部　（朱）葭１：音加　豝２：百加反　虞３－５：叶音牙　（熊）虞３－５：協牙

江有誥と朱熹では、古音の推定が逆であるが、熊はやはり時代の接近した朱と同様の考え方をしている。

第４点は、遇摂と通摂をつなぐ例が存在すること、熊の表現で言えば、「当通虞音於東韻」〔虞音が東韻に通じるとみなすべき〕現象があることである。熊の挙例は次のようなものである。

『詩経』

1．召南25騶虞２章　（江）《蓬１》　《豵２》　東部／乎３－３　《虞３－５》　与上章遙韻（即ち魚部）　（朱）豵２：子公反　虞３：叶五紅反

『周易』

2．上経「屯」六三爻辞　（江）無韻　（熊）虞　中

１の「騶虞」の２章については、熊は朱熹と同じような考え方を取り、江のように章中に換韻があるとは考えず、「虞」字の音を陽声韻に転換させ、東韻（-ng）の音に調和させることで押韻が可能になるとするのであろう。２の爻辞についても同じである。先に見たように（〈第３段〉第３点)、熊にとっては遇摂の音は、おそらく同一の入声を媒介として通摂と相配でありえるのだから、通摂舒声の音に転じることがあってもおかしくはない。ただし、後の目から見れば、ここの「虞」字は上古侯部からきた虞韻字ではなく、魚部の字であるから、熊らが考えるほど韻が近くはない。また、「中」は中部の字である。

第５点は、流摂と止摂とつなぐ例が存在すること、熊の表現では、尤侯が脂韻に調和しうる(「尤侯亦可協脂韻」) ということである。これは、上古の之部から中古の侯・尤韻に入った字があることに由来する。熊の挙例は次の通り。なお熊は、『詩経』のうちにこの種の例ははなはだ多いとしている。

『詩経』

1．小雅203大東４章　（江）子１　子３　子５　子７　四子字為韻／来２：音吏　服４：扶備反　裘６：音忌　試８　之部　（朱）来２：音賚、叶六直反　服４：叶蒲北反　裘６：叶渠之反　試８：叶申之反　（熊）以裘協奇

2．小雅163皇皇者華３章　（江）騏１　糸２　謀４：謨丕反　之部　（朱）騏１：音其　糸２：叶新齎反　謀４：叶莫悲反　（熊）以謀協騏

１で熊が「裘」の音を表すのに用いている「奇」は支韻の字で、上古歌部であるが、熊は当然、清朝中期の学者のように止摂の諸韻を更に分析するほどの発想には至っていなかったのであろう。

第６点は、效摂と宕摂をつなぐ押韻が存在することである。熊の挙例は次のようで、例中「消」字は宵部、ほかの-ng韻尾の字は「邦」（東部）を除いて陽部の字である。熊は先の第４点におけると同じく、相対応する陰・陽声として音がすなおに転換しうると考えていたのではなかろうか。

『周易』

1．上経「泰」彖伝　（江）無韻　（熊）長　消か。消：協襄。

2．上経「否」彖伝　（江）無韻　（熊）邦（？）陽　剛　長　消か。消：協襄

また、この第４段で、熊が参照している項安世の説は、項の「詩音類例」によれば次の通りである。熊はやはり項はすべてを尽くしていないと考えている。

1（熊）「以虞尤豪為一例」　（項）「虞字尤字豪字三韻聚而一者」

鄘風54載馳１章　（江）駆１：音薑　侯２　侯部／悠３　漕４：音愁　憂６　幽部　（朱）駆１：叶祛尤反　漕４：叶徂侯反

2（熊）「虞麻為一例」　（項）「虞与麻聚」

邶風31擊鼓３章　（江）居１－２　処１－４　馬２：音姥　下４：音戸　魚部　（朱）馬２：叶満補反　下４：叶後五反

項説の１は上の第１点、２は第３点と関連する。２の『詩集伝』の協韻は、上の第３点において熊が「虞」字の音を「牙」とするのと音の合わせ方が逆であるが、後の第８段の記述から、熊も、「馬」字の古音は音「姥」、「下」は音「虎」と考えていたことがわかる。また、項、朱ともに１の「載馳」１章に（侯部から幽部への）換韻があるとは想定しておらず、遇摂の字が流・效両摂の字と通押することがありうると考えていたと思われる。熊も同様の考えだったのではなかろうか。

〈第５段〉

第５段は、鄭庠の第六部が中古深摂と咸摂の字を１部にまとめ、すべて「侵音」に調和する（熊）としていることに対する批判である。この鄭の第六部については、戴震は「みな覃韻に従

う」としていて、熊の言うところと食い違っているが、鄭の書が失われているのでどちらが正しいかよくわからない。熊は、下の（１）のような押韻の型が『詩経』の韻の一つの通例ではあるが、（２）のように侵・覃韻が通摂と結びつく例もあり（熊の表現では「易詩以侵覃之韻協風躬諸字」）、（３）のように侵韻が宕摂とつながる例もあり（熊の表現では「侵韻又通於陽唐」）、鄭の分部だけでは網羅的ではない、項安世の挙例でもまだ十分ではないとしている。

（１）

『詩経』

1．小雅161鹿鳴３章　（江）芩２　《琴４》　《琴５》　《湛６》：都森反　心８　侵部　（朱）芩２：其今反　湛６：都南反、叶持林反

2．大雅252巻阿１章　（江）《南２》：奴森反　《音５》　侵部　（朱）南２：叶尼心反

3．邶風28燕燕３章　（江）《音２》　《南４》：奴森反　心６　侵部　（朱）南４：叶尼心反

4．魯頌299泮水６章　（江）《心２》(26)　《南４》：奴森反　侵部　（朱）南４：叶尼心反

（２）

諧声例

凡（『広韻』符芝切（27）、平声凡韻奉母）

～風（『広韻』方戎切、平声東韻三等非母・方鳳切、去声送韻三等非母）

芃（『広韻』房戎切、平声東韻三等奉母・薄紅切、平声東韻一等並母）

汎（『広韻』房戎切、平声東韻三等奉母・孚梵切、去声梵韻敷母）

押韻例（熊はこのほかに第３段の第２点の挙例も参照せよとしている。）

『詩経』

1．大雅260烝民８章　（江）《風６》　《心８》　侵部　（朱）風６：叶孚愔反　（熊）風：在東韻為方馮切、在侵韻旁協孚愔切。風有凡之声、亦可為馮。　心：亦可為鬆。

2．邶風27緑衣４章　（江）《風２》　《心４》　侵部　（朱）風２：叶孚愔反　（熊）風：同上　心：同上

3．秦風132晨風１章　（江）《風１》　《林２》　欽４　侵部　（朱）風１：叶孚愔反　（熊）風：同上　林：亦可為隆。

4．小雅199何人斯４章　（江）《風２》　《南４》：奴森反　心６　侵部　（朱）風２：叶孚愔反　南４：叶尼心反　（熊）風：同上　南：亦可為儂。

（３）

『周易』

1．（熊）「禽協強」（「禽」字の音が「強」の音に調和することがあるという意味と思われる。）

出典箇所不明。或いは下記の部分を一貫させて１韻としたものか。

上経「屯」象伝　（江）禽　窮　中侵合韻／明　光　長　陽部

２．（熊）「深協觴」　出典箇所不明。或いは下記の部分かと思われるが、韻字の声調が一致しないのが問題である。

「繫辞伝」上（「無有遠近幽深」とその前後）象　行　響　深　象

（２）は、第３段の第２点と同じく、上古の侵部と中部の関連性をとらえたものである。ただし、これらの諧声文字や押韻例の背景にある実際の古音については、熊は侵韻と東韻どちらの音に合わせてよいか決めかねているようである。類別のみわかって音値を求める手法に乏しい伝統的な音韻研究の弱点が顕著に現れたもので、時折朱熹の『詩集伝』にも見られる特徴である。（３）は、すべての押韻の型を網羅しようとするあまり、韻の枠を広く取りすぎたものと言ってよかろう。

この段で引かれている項安世の説は以下の通りである。

１（熊）「以侵覃塩為一例」　（項）「侵字覃字塩字三韻聚而為一者」

小雅208鼓鐘４章　（江）欽１　琴２　音３　南４：奴森反　僭５：音祲　侵部　（朱）南４：叶尼心反　僭５：子念反、叶七心反

２（熊）「以侵東為一例」　（項）「東与侵聚也」　先の第３段の３に同じ。

この項説の１は上の（１）に、２は上の（２）に関連している。

４．「易詩書古韻」について　その三：第６～８段　鄭・呉へのその他の批判

鄭庠の分部についての熊の批判は、上の第５段までで終了する。次の第６段から第８段においては、鄭庠の方法論や呉棫の『詩補音』について、またその他の古韻の問題について個別の評論や、簡潔な考証を行っている。上の第３章におけると同じく、段ごとに内容を検討してゆくことにしたい。

〈第６段〉

第６段では、熊は鄭が挙げている古韻から今韻への字音の変化の例や、それをとらえる際に採用している説明方法が、（第５段までで見たような）彼の「韻例」と符合しない所を持っていると指摘している。熊によると、鄭は、その説明方法として、神珙の「四声五音九弄反紐図」に見える「旁声」・「正声」という概念を用いており、「正声」とは「在一紐之中」、「旁声」とは「出四声之外」なるものを指すという。これは、『玉篇』重修本に付録されている「四声五音九弄反紐図序」に見える「傍紐者皆是双声、正在一紐之中、傍出四声之外。」という叙述を引用した

ものと思われる。但し『玉篇』に見える「四声五音九弄反紐図」の本文には「正声」・「旁声」の語はなく「正紐」・「傍紐」があり、「正紐」の例として、例えば「真整正隻」・「盈引脛懌」などの字音の関係が挙げられ、「傍紐」の例として、例えば「真征顫之」・「盈寅筵怡」などの字音の関係が挙げられている。図中の例字にやや疑問の残るものはあるものの、これらの例から推測すると、「正紐」とは、『文鏡秘府論』に引かれた「四声譜」が同音で四声だけが異なる字音のグループを「紐」と呼んでいるのと同じように、声調だけを異にして転化して行く一連の音のことを指し、「傍紐」とは、おおまかに言えば、双声（同声母）の関係を軸にして転化してゆく一連の音のことを指すものと思われる。熊の言いたいのは、鄭説で「旁声」とされる例の中に鄭の分部をはみだすものがあることであるらしい。熊が指摘している例は次の通りである。古音の例については、参考のため、呉棫の『韻補』と陳第の『毛詩古音考』が定めている音を掲げておく。

押韻例

『詩経』

1．豳風154七月１章　（江）火１：音毀　衣２：上声　脂部／発３：廃入声　烈４　褐５：胡折反　歳６：音雪　祭部／耜７　趾８　子９　畝10：満以反　喜11　之部　（朱）火１：叶虎委反　衣２：叶上声　発３：叶方吠反　烈４：叶力制反　褐５：音曷、叶許例反　歳６　或曰、発烈褐皆如字、而歳読如雪　耜７：叶羊里反　子９：叶奨履反　畝10：叶満彼反　（鄭）以歳為雪

2．大雅245生民７章　（江）軷８：音蹩　烈９　歳10：音雪　祭部　（朱）軷８：蒲末反、叶蒲昧反　烈９：如字、叶力制反　歳10：叶音雪、又如字　（鄭）以歳為雪

3．小雅169杕杜４章　（江）載１－２：稷去声　来１－４：音吏　疚２：音記　之部／至３：入声　恤４　偕５：音几　（近６：不入韻、顧氏謂古音記、非。）　邇７　脂部　（朱）来１：叶六直反　疚２：叶訖力反　至３：叶朱力反　偕５：叶挙里反　近６：叶渠紀反　（鄭）以至為窒

4．豳風156東風３章　（江）垤５：徒一反　室６　窒７　至８：入声　脂部　（朱）垤５：田節反、叶地一反　至８：叶入声　（鄭）以至為窒

例字

1．来：音利　『韻補』良置切　『毛詩古音考』音利

2．来：音力　『韻補』録直切　『毛詩古音考』音力

3．又：音異　『韻補』該当音なし（但し『詩集伝』220賓之初筵５章　又14：叶夷益夷豉二反）　『毛詩古音考』音意

4．又：音亦　『韻補』夷益切　『毛詩古音考』該当音なし（音亦は「旧音」で「無的拠」であると注する）

5．世：音設　『韻補』私列切　『毛詩古音考』音泄

6．逝：音折　『韻補』食列切　『毛詩古音考』音折

鄭説は古韻の入声韻を中古音と同じように陽声韻に対応するものと認めるため、上のような陰・入通押の例を「旁声」とせざるを得ないのではなかろうか。例えば、中古後期の韻図では入声韻は陰・陽の両方に相配であるが、宋代の成立かと言われる『四声等子』では蟹摂には山摂の入声が、止摂には臻摂の入声が配されていて、上の「歳」と「雪」、「世」と「設」、「逝」と「折」等の音はこの相配関係にかなっているわけだから、もし陰・入が相配であるなら、これらは「一紐の中」にあるとされてもおかしくないのである。ただし『切韻指掌図』や元代の『経史正音切韻指南』では蟹摂の細音（三・四等韻）と合口一等韻は止摂と合流させられていてもはや山摂の入声と相配ではないから、このような基準によれば、上記のような字音は対応する去声音と入声音であるとは言えなくなる。

熊はさらに、鄭の説明法に照らせば「旁声」と呼べるものはもっとほかに例が見られ、鄭にも呉にも取りこぼしがあると指摘する。熊の挙例は、次のような押韻例と古音の例である。古音のほうは、おそらく『経典釈文』その他の音注例を踏まえているものと思われるので、それも掲げておく。

押韻例

『詩経』

1．周頌284有客１章　（江）馬２：音姥　旅４　（信６：無韻）　馬８　魚部／追９　綏10　威11　夷12　脂部（江は、宿5不入韻。）　（朱）馬２：叶満補反　馬８：同上　（鄭）宿５：改作俁（『広韻』虞矩反、上声麌韻疑母）　（熊）宿５：協瀡（『広韻』思累切、去声寘韻合口心母　『集韻』又髓随切、平声支韻合口心母）

2．邶風34匏有苦葉２章　（江）瀰１－２：与鷕協　鷕２－２：以水反　脂部／盈２　鳴３　盈３－２　鳴４－２　耕部／軌３：音九　牡４　幽部　（朱）（瀰１－２：彌爾反　鷕２－２：以小反）　軌３：居美反、叶居有反　（鄭）牡４：改作牝　（熊）牡４：協美

字音例

1．犧：音娑

『詩経』小雅「鼓鐘」「犧象」『経典釈文』：素何反　『礼記』「礼器」「犧尊」『経典釈文』：鄭素何反　ほか

2．華：音敷　『韻補』芳無切　『毛詩古音考』音敷

『爾雅』「釈草」「華、荂也」郭璞注：今江東呼華為荂　『詩経』召南「何彼襛矣」「之車」『経典釈文』：古読華為敷　（『韻補』・『毛詩古音考』ともこの２例を引く。ただし、郭注については『韻補』は「江東謂華為敷」、『毛詩古音考』は「江東読華為敷」として引用している。）

3．羹：音郎　『韻補』盧当切　『毛詩古音考』音岡

『春秋左氏伝』昭公十一年伝「不羹」（楚の地名）『経典釈文』：旧音郎　十二年・十三年伝「不羹」『経典釈文』：音郎　（『韻補』はこの『左伝』の『釈文』を引用している。）

『集韻』盧当切、平声唐韻開口来母

押韻例の１では、江有誥も朱熹も韻字としない「宿」（幽部入声）(28)の音を苦労して合わせている。鄭がこれを「俁」に改めるのは、前後の魚部の韻字の音に調和させたのであろうし、熊が「協瀡」とするのは、後の脂部の韻字の音に調和させたのであろう。押韻例２の「軌」字は「逵」・「簋」等とともに上古の幽部から中古脂韻に入った字である。鄭が押韻相手字の「牡」を「牝」(-n）に改めるのは、「盈」・「鳴」(-ng）の音と合わせたものかもしれないが、声調は一致しない。呉棫の『韻補』は「牝」字に「補履切」という音を付けている(29)が、或いは鄭はこれと同じような音を採って、「牝」が「軌」の音に調和すると考えたのかもしれない。熊は「牡」の音を「軌」に合わせる。『詩集伝』とは逆のやりかたである。後世は『詩集伝』のような推定の方が主流になる。

〈第７段〉

第７段は、呉棫に対する批判である。熊は、呉の『詩補音』（熊は「協韻補音」と呼ぶ）は証拠となる資料の引用が詳細で、かつ『詩集伝』よりも先んじており、『詩経』の学に対する功績は鄭庠よりも優れていると言えるものの、熟読してみると間違いが見つかった、と述べて、次の３点を例に上げている。

第１点は、『詩経』の「常棣」第４章の「戎」字の音に関してである。熊は関連する証拠として「常武」の第１章も取り上げる。これらの詩章の押韻を、熊が引く先行の諸説（劉敞・呉棫）と共に掲げれば次のようである。熊が引く呉棫の説はこの段全体を通じて『詩補音』に見えるものらしいが、参考までに『韻補』の音を挙げておく。

小雅164常棣４章　（江）（侮２：経作務、今从左伝）（戎４）無韻　（朱）務２：春秋伝作侮、罔甫反　戎４：叶而主反　（熊）戎４：協戎之上声、音汝（『春秋左氏伝』僖公二十四年伝は第２句を「外禦其侮」と引用する。）

（宋）劉敞『七経小伝』　戎４：改為戍(30)

呉棫　務２：音蒙　『韻補』務：謨蓬切

大雅263常武１章　（江）祖３：三句起韻　父４　戎６：疑当作武　魚部　（朱）士２：叶音所　父４：音甫　戎６：叶音汝　（熊）戎６：協戎之上声、音汝

熊は、『詩経』のいくつかの詩篇において、「戎」が２人称代名詞の意味で用いられていることから、「戎」は古には「汝」と同音であったと推定し、『左伝』の異文も参照して、この篇は「戎４」が「音汝」で韻が合うと考えた。そこで、「務２」の音を「戎４」に合わせる呉の説を退けるわけである。これらの詩篇において朱熹の説はむしろ熊に一致している。呉が「務」を音「蒙」と

するのを批判し、「戎」が「汝」に通仮することから、「戎」に「汝」の音を推定するのは、朱熹自ら呉棫説に対する独創と認めていたことであって、そのことは『朱子語類』の巻八十に見える(31)。熊はまた、「常棣」4章に関する劉敞の説については、「字に四声があることを思ってもみない」(「不思字有四声」)ものだとして批判している。熊が音「汝」を「戎の上声」だと表現しているのは先に述べた通りで、このような記述からも、熊が鄭庠のように陽・入相配にこだわらず、陰声韻にも対応する入声があり、陽声韻から陰声に転じることもあると考えていることがわかる。

第2点は、『詩経』の「文王有声」第3章の韻字「欲」と「孝」についてである。

大雅244文王有声3章　(江)欲4：去声、礼記作猶　孝5：呼瘦反　幽侯合韻、若从礼記作猶、則在本部　(朱)欲4：礼記作猶　孝5：叶許六反、或呼侯反　(熊)猶4：去声、与欲字音相近故訛作欲。(『礼記』「礼器」は第4句を「匪革其猶」と引用する。)

呉棫　孝5：音畜(呉説の傍証：『礼記』「祭統」「福者、備也。……。孝者、畜也。」)

熊は、この「文王有声」の「欲」字については、「猶」の去声と音が近いため『詩経』のテキストが誤って伝わったものと考えている(32)。熊はまた、呉が証拠としているという『礼記』「祭統」篇の「孝者、畜也。」は「孝」の字音とは全くかかわりがない記述であると考え、(もし呉のように考えれば)「福が備の音であるということになるではないか」と反論している。これらは、後の目から見れば、「福」・「備」は上古之部、「孝」・「畜」は幽部の字であって、字音上の関連が深く、声訓の一種と言ってよいものなのであるが、熊は通摂入声と止摂の音が古韻においても疎遠であると考えていたのであろうか。

ここで取り上げられている「常棣」4章・「常武」1章・「文王有声」3章は、王力の『詩経韻読』では、それぞれ、「務」と「戎」で「幽侵合韻」、「士」・「祖」・「父」で「之魚合韻」(「戎」は無韻。「武」である可能性にも言及。)、「猶」(「欲」から校訂。)・「孝」で幽部の押韻とされており、もともと韻が合わせにくい箇所であることがわかる。ちなみに、(清)江永の『古韻標準』では、江が幽部と侯部を分かたないため「欲」と「孝」は入声第一部と去声第十一部の間の去入通押である。また、「常棣」・「常武」の押韻に基づき、「務」は上声第三部(魚部にあたる)とされ、「戎」は上声第三部と平声第一部(東部・中部にあたる)に兼属とされている。「戎」に上声第三部の音があることについて江永は、この字に「汝」の意味があったことから音が転じたもので、一般的な古韻の法則に沿わない音韻の変化であると説明している。(清)段玉裁の『六書音均表』では、「士」・「祖」・「父」・「戎」で第五部(魚部にあたる)の「合韻」、「務」・「戎」で第三部(幽部にあたる)の「合韻」、「欲」と「孝」は段の第三部入声が幽部と侯部の両方の入声を含んでいるため、同一韻部内の押韻となる。

第3点は、『詩経』の詩篇に現れる「母」字の音に関してである。熊は、「母」・「畝」の2字は『詩経』の中ではすべて「音美」であって例外はないと考えている(「母字例音美。」「母皆音美、

畝字在詩中亦無不音美。」)。この点などにおいては、熊の観察は、古の字音は押韻の都合によって自由に変動したものではなく、各字に固定した古音があったはずで、古韻の観察により１つかそれに近い数の読音が求められる、という認識に至る可能性をはらんでいると思われる。そこで、熊は、以下の詩篇については別な音を想定する呉の説と、それを承けた『詩集伝』の記述を批判している。

1．周南２葛覃３章　（江）否５：方鄙反　母６：満以反　之部　（朱）否５：方九反　母６：莫後反　（熊）否５：協鄙　母６：音美

2．鄘風51蝃蝀２章　（江）雨２　母４　之魚借韻　（朱）母４：叶満補反　（熊）雨２：協唯　母４：音美

3．斉風101南山３章　（江）畝２：満以反　母４：同上　之部　（朱）畝２：莫後反　母４：莫後反　（熊）畝２：協美　母４：音美

4．大雅240思斉１章　（江）母２：満以反　婦４：芳鄙反　之部　（朱）母２：莫後反　婦４：房九反　（熊）母２：音美　婦４：協菲履之菲、即扉之上声

呉棫　母：莫後莫補二切　『韻補』母・畝：莫補切

〈第８段〉

「易詩書古韻」最後の段である。ここで熊は「古韻について学ぶ者は呉・鄭の説のよいところを取り『詩集伝』によって正せばほぼまちがいない。」(「呉鄭之説学者各就其所長而就正於集伝可也。」）とそれまでの論旨をしめくくり、続いて次のような５種の例を列挙している。この５種は熊が古韻研究上で会得した要点をいくつか挙げたものであろうが、相互の間にあまり一貫性が見いだせない。

（１）古人にとってはふつうの音で、今の学者だけが不思議に思うもの。熊は音だけを挙げているが、ここでは呉棫『韻補』と陳第『毛詩古音考』から該当する音を付記して示す。

来：音釐　『韻補』陵之切　『毛詩古音考』音釐

慶：音羌(33)　『韻補』墟羊切　『毛詩古音考』音羌

儀：音義　『韻補』・『毛詩古音考』該当音なし　音「莪」であれば、『韻補』牛何切　『毛詩古音考』音俄

華：音敷　『韻補』芳無切　『毛詩古音考』音敷

馬：音姥　『韻補』満補切　『毛詩古音考』音姥

下：音虎　『韻補』後五切　『毛詩古音考』音虎

有：音以　『韻補』羽軌切　『毛詩古音考』音以

「儀」の音「義」は、先の第４段で熊が述べるところと考え合わせると、音「莪」の誤りではないかと思われる(34)。(宋）陳振孫の『直斎書録解題』を見ると、巻二の呉棫「毛詩補音」の条

には「其説以為詩韻無不叶者、如来之為釐、慶之為羌、馬之為姥之類。」云々とあり、巻三の呉棫「韻補」の条には「今之読古書古韻者、但当随其声之叶而読之。若来之為釐、慶之為羌、馬之為姥、声韻全別、不容不改。」とあって、上の例のいくつかは呉棫の代表的な説とみなされていたものだったらしいことがわかる。全体として、熊の見解は、呉棫の説を承けながら、直音注の文字遣いも含めて、次の陳第の学問へとつながる結論に到達していると言うことができる。

（2）古音が近いための通仮の例。挙例は次の1例のみで、出典不明である。『礼記』の「中庸」の一節と関係があるかと思われる。

「君子顧言而行」の「顧」を「寡」と書くことがある。(『礼記』「中庸」「言顧行、行顧言。」)「顧」・「寡」ともに魚部の字である。

（3）『詩経』と『易経』の韻が符合するもの。1つは韻字「華」を含む押韻例で、上記（1）に見えた「華」に「敷」の音があるという見解と符合する。1つは韻字「望」を含む押韻例で、「望」に平声の音があると認める根拠になるものである。熊が押韻していると明言している韻字には《　》を付す。

1．『詩経』小雅163皇皇者華1章　（江）《華1》：音雩、与夫協　《夫3》　魚部　（朱）華1：芳無反、与夫叶

『周易』上経「大過」九五爻辞　（江）《華》：音雩　《夫》　誉　魚部

2．『詩経』大雅252巻阿6章　（江）印1　璋2　望3：平声　綱5　陽部　（朱）望3：叶無方反

小雅225都人士1章　（江）黄2　章4　望6：平声　陽部　（朱）望6：叶音亡

『周易』下経「帰妹」六五爻辞　（江）良　望：平声　陽部

下経「中孚」六四爻辞　（江）望：平声　亡　陽部

（4）『易経』から推定される古音の例。熊は音しか示していないが、ここでは『韻補』・『毛詩古音考』に該当する音があればそれを、また、江有誥の『群経韻読』中にこの古音が割り出されるような押韻箇所がある場合はそれも付記して示す。

上：音常　（江）『周易』上経　「比」象伝　傷　上：平声　陽部　「頤」象伝　光　上：平声　慶　陽部　下経「睽」象伝　上：平声　行　明　行　剛　陽部　「萃」象伝　常　光　上：平声　陽部　「中孚」象伝　当　上：平声　当　長　陽部　「小過」象伝　当　長　上：平声　亢　陽部

応：音央　根拠不明。或いは次の押韻部分が一貫してとらえられたものか。（江）『周易』下経「升」象伝　升　応：平声　蒸部／亨　慶　行　陽部

疑：音牛　根拠不明。

疑：音乂　『韻補』魚記切　（江）『周易』上経「小畜」象伝　志　富：方備反　載：茲去声　疑：去声　之部　下経「遯」象伝　災：茲去声　志　憊：音備　事　否：痞去声

志　疑：去声　之部　「損」象伝　志　志　疑：去声　喜：去声　祐　志　之部
「升」象伝　志　喜：去声　疑：去声　事　志　富　之部　「兌」象伝　疑：去声　志　之部

（5）『詩経』「周頌」「清廟」の韻に関して、次のような文字が押韻している可能性もあると考えているもの。

『詩経』「周頌」「清廟」　（江）無韻　（朱）周頌多不叶韻、未詳其説　（熊）廟1　相2／天5　承7　人8

「廟」は宵部、「相」は陽部。第4段の第6点において取り上げていたのと同じく、效・宕2摂の字の押韻を認めたものである。また、後半の「天」・「人」は真部、「承」は蒸部だが、第2段に述べられていたように、「天」字と臻摂（-n）・曾摂（-ng）の字が結ぶ押韻を可能とするところから現れた見解であろう。

5．ま　と　め

以上、特に2段から8段に至る熊朋来の叙述から、熊は古韻の中の中古音の枠ではとらえにくい通韻現象について、次のような原因でおこるいくつかのパターンを、もちろん後世のような精密な分部に基づいてではないが、とらえていたことがわかる。

1．上古の侵部と中部の関連が深いため、中古の侵・咸摂と通摂の字が一部通押する。
2．上古の東部・中部において、中古の江摂の字は通摂の字と同部である。
3．上古の侯部の字は、中古の遇摂と流摂に分属した。
4．上古の歌部の字には、中古の果摂・仮摂に入ったものと、止摂（支韻）に入ったものとがある。
5．上古の魚部の字は、中古の遇摂と仮摂（麻韻）に分属した。
6．上古の之部の字には、中古の止摂に入ったもののほか、流摂にも入ったものがある。

しかし、上記のような学史上評価できるもののほかに、すべての押韻例を網羅しようとするあまり、ややゆるやかすぎる韻字の認めかたをしている箇所があることも事実であった。そのほかに熊は、古韻においては、後に言うところの陰・陽・入の対転のような現象が起こるという認識も持っていたようである。もっともそれが今韻と比べて違う点だと考えていたかどうかさだかではない。むしろ古今を一貫させた発想であったかもしれない。いずれにしろ、遇摂・流摂と通摂、效摂と宕摂は、各々と相配の入声韻と共に、熊において関連の密接なものとみなされていたようだ。但し第1段に見える相配例「功古故刮」は通・遇摂一等に山摂二等鎋韻の入声を配していてやや問題がある。熊の方言音の干渉の可能性等を含めて検討してみることが必要である。また熊

は、今韻と字音の声調が違うと認められる押韻例が多数あれば、それを古韻における音として新たに立てているようである。これは陳第が『毛詩古音考』で取った方法と同じである。もちろん、古今の音変化ということについて熊と陳第では認識に相違があったかもしれないにしても。

ところで熊が、これら今韻の枠をはみだすような通韻がおこる原因をどう考えていたか、明確にするためには更に検討を深めてゆかねばならないが、一つの手がかりは、「易詩書古韻」第2段の「声音之道変動周流、例有尽、而音無窮也。」という叙述で、彼は言語音には転化が起こりやすいと考えていたらしい。その音の転化の道筋として、四声による変化（すなわち声調の転換）や「丁顛」のような助紐字が示す韻母の変化があったようである。ここには等韻学の影響が見られる。

しかし、そのような音の転化がなぜ古韻にしばしば起こるのか。また、呉棫やそれを承けた陳振孫の『直斎書録解題』が主張するところの(35)、ゆるやかに通押が認められる韻群と音が転じなければ通押と認められない韻群との区別があるという考えについて熊が賛成していたのかどうか。熊は「母」字や「畝」字の音が少なくとも『詩経』の中に関する限りすべて音「美」であることに気づいているから、あるいは、個々の文字にかなり固定した古音があるとみなし、それ故に例外的現象の説明に音の転化を持ち出したのであるかもしれない。この点、熊のように『詩経』等を読んだ場合、個々の文字にどのような音がどれだけあることになるか、今後考察を深める必要がある。

またこれも一つの手がかりに過ぎないが、熊には古と今とで音韻の基礎方言に違いがあるという考えがあったように思われる。それは『熊氏経説』の巻七「評韻釈」の条で、「声韻起江左、非古之正音也。」〔韻書は江東地方から始まったので、古の正音を反映してはいない。〕と述べていることや、同じ条で、方言音に「小異」があるなどした場合いちいち韻書にその音を収録していては、例えば麻韻の三等字が二等字と同じ韻であるのは「中原雅音」と合わないわけだから別に韻を立てなければならないことになる、と述べて、そのような理由で既存の韻書の内容を変改することに反対していることなどから想像される。では、地域が違えば音も違うとして、熊は古韻と今韻との間の時間的な差をどうとらえていたのか、呉棫らの言う協韻とはどういうことだと認識していたのか、それらのことについては、宋・元・明代を通した学史の流れのなかで無理のない解釈をしてゆかねばならず、筆者にとってこれからの重要な課題である。

注

(1) 項は南宋の人、淳熙年間（1174-1189）の進士。その著『項氏家説』の巻四に「詩音」・「詩句押韻疎密」・「詩押韻変例」・「重押韻」・「詩音類例」といった条がある。

(2) 陳新雄『古音学発微』p.22、何九盈『中国古代語言学史』p.133

(3) 何九盈『中国古代語言学史』p.133-135、王力『清代古音学』第一章p.1

(4) 『元史』巻百九十（列伝第七十七、儒学二）本伝

(5) 『通志堂経解』本の本文は、「書慘為懆」の部分が、割注とされ、かつ「書為慘懆」となっている。『四庫全書』本は「書慘為懆」で、割り注としない。下の「書淵為鼘」の部分に照らして、『四庫全書』本が正しいと思われる。

(6) この部分を、『通志堂経解』本は「書淵為皷淵音於巾切」、『四庫全書』本は「書淵為鼓淵音於巾切」とする。上の「書慘為懆、音七到切」の部分の体裁と、注(9)に引く『韻補』の記事に照らして、この「皷淵」・「鼓淵」は、「鼘」もしくは「鼘」字が誤って2字とされたものと思われる。

(7) 宋代に科挙で韻文を作る際の規範とされたのが官撰の韻書『礼部韻略』であったから、「韻略」の語で、科挙の規範として用いられた今韻系の韻書を代表せしめたものと思われる。必ずしも宋代に『礼部韻略』が編まれた後のことだけを指しているのではない可能性がある。

(8) 張参『五経文字』巻中「心」部に「懆、千到切、見詩。」とある。また、呉棫『韻補』巻四に「慘、七到切。開元五経文字書慘為懆、音操、詩曰我心懆懆、憂而不楽也。詩抑与月出二篇皆当読如操。」とある。

(9) 呉棫『韻補』巻第一、十七真に「鼘、鼓声也。毛詩伐鼓淵淵、開元五経文字作鼘。」とある。付された音は「一均切」である。『広韻』には「鼘」於巾切（平声真韻開口影母三等）、『集韻』には「鼘」於巾切（平声諄韻開口影母三等）、「鼘」一均切（平声諄韻合口影母四等）の音がある。張参『五経文字』の現行本に該当する記事は見えない。

(10) 清の陸心源が南宋の孫弈の作と推定している『九経直音』のことか。

(11) ふつう呉棫の字は「才老」とされる。

(12) 後の第7段にも「呉棫協韻補音」という名称が登場する。呉の著『詩補音』のことを指したものかと思われる。この著は『韻補』の徐蔵の序では「詩補音」、陳振孫の『直斎書録解題』では「毛詩補音」という書名で記録されている。

(13) 頼江基「呉棫所分古韻考」pp.80-82

(14) 韻の名としては「真」とあるべきところであるが、『通志堂経解』本・『四庫全書』本ともに「貞」に作る。「易詩書古韻」中、真韻に該当する韻の名が「貞」とされているのは計3カ所、そのまま「真」と書かれているところは1カ所で（すべて第2段）、『通志堂経解』本・『四庫全書』本とも同じである。歴史上の避諱の例としては、北宋の仁宗の諱が「禎」で、嫌名の「貞」を避けて「真」に作ることがあったという（『歴代避諱字匯典』p.634）。原本で「真」と書かれていたもののいくつかが後世誤って避諱とみなされ「貞」と過剰矯正されたものかもしれないが、或いは単に字形が似ているための誤刻であるかもしれない。元代に「真」を避けたという記事は陳垣の『史諱挙例』にも見えないようである。これ以後原文で「真」韻とあるべきところが「貞」韻とされている箇所では、「貞（真）」として示す。

(15) 切韻系韻書等で韻の名になっている「桓」字は北宋の欽宗の諱であるため、南宋時代に編纂された『増修互註礼部韻略』(紹興32年〔1162〕表進。)や『附釈文互註礼部韻略』(淳熙年間〔1174-1189〕成。)では、「歓」韻と改められている(『歴代避諱字匯典』p.189)。熊の表記はこれらと一致している。

(16) 「仙」韻の「仙」字は原文では『集韻』等のそれと同じく「僊」に作られている。ちなみに熊が「肴」韻を改めて「爻」韻と呼ぶのも『集韻』と同じである。この「僊」字は本稿では印刷の都合等から「仙」に改めた。以下の部分でも同じである。

(17) 『中国古代語言学家評伝』pp.242-251「呉棫・鄭庠」の条

(18) 『集韻』の平声十八諄韻韻末に「天:鉄因切」・「年:禰因切」・「苓:戾因切」・「顛:典因切」・「田:地因切」というそれぞれ1字だけからなる小韻がある。熊は、これらの音を古詩の韻に基づいて置かれたものだとしている(「易詩書古韻」第4段「故丁韻天田年等字皆附入真諄之韻、此古詩韻例也。」)。王力の『漢語詩律学』は、唐代の詩人が古体詩を作る際古人の用韻を模倣することがあったことを紹介し、彼らは、例えば『詩経』の中で「人」字が「田」字と押韻しているのを見つけると、古には真韻と先韻が完全に相通であったのだと誤解して、自作の中で真韻と先韻のすべての文字を自由に押韻させるようなことを行っていた、と述べている(第三章第三節「古体詩的用韻(二)通韻」)。

(19)丁仲祜編『全漢三国晋南北朝詩』「全漢詩」巻三

(20)これより以下、詩文の押韻例を引用する際は、その押韻字だけを示すこととする。例えば「天4」とは、この詩の4句目の韻字が「天」であることを示す。また例えば「天4－2」などとなっている場合は、句中韻である。つまり、4句目の2字目が「天」で、それが押韻に参加していることを示す。例が詩ではなく文の場合は、何句目かを示さず、韻字だけを示す。

(21) (1)の『詩経』の挙例のうち多くは「天」・「人」2字のみから成るが、5や8は例外である。むしろ鄭説と合致しない(2)の挙例の方に含めるべきかもしれない。

(22) 『詩経』の詩篇には『詩経』全体を通じた通し番号を付しておく。例えばここではこの「柏舟」が『詩経』の第45番目の詩であることを示す。

(23) この場合、とりあえず熊が挙げる韻字「真」は「貞」の誤りではないかとみなす。注(14)参照。

(24)「丁顛」は舌頭音端母の助紐字であり、「天」が透母であるのと合わない。『韻鏡』に見える透母の助紐字は「汀天」である。「汀天」には同じ「天」字が含まれるので避けたのかもしれないが、とりあえずここでは、端母が同じ舌頭音の最初の字母であるから、「丁顛」を助紐字の代表として掲げたと考えておく。

(25) 熊はこの弓3を「躬」に作る。理由は不明。

(26) 熊は「泮水」においても「卷阿」・「燕燕」と同じく「音」字と「南」字が押韻している(「以南協音」)と述べている。ここでは「泮水」の「心」を「音」と思い違えたものとみなす。

(27) 沢存堂本では「符咸切」である。ここでは周祖謨の校勘記に従う。

(28) 本稿で個別の字の上古音を求めるための参考書としては『漢字古音手冊』を用いたが、同書は王力『漢語史稿』の説に基づいており、従って入声韻は独立した韻部をなしている。ここでは、本稿で詩文の韻字を求める際に参照している江有誥の説にならって陰声・入声を同じ韻部とする場合の分部に従った。以下同様である。

(29)『韻補』が例証として引いているのは『老子』の「谷神不死、是謂玄牝」の部分の押韻である。また「牝」が脂部の字であると認める場合、声符が「匕」であることもしばしば証拠とされる。但し『韻補』は「軌」字には「巳(己の誤りか?)有切」の音を付けている。

(30)『七経小伝』巻上「常棣之四章曰、案此詩八章、七章合韻、惟此戎字不合韻。疑戎当作戍。戍亦禦也。字既相類、伝写誤也。」

(31) 頼惟勤「清朝以前の協韻説について」(著作集pp.64-65)。

(32) 『熊氏経説』巻六「礼記引詩」の条にも「如……匪革其猶……、皆訛於詩家。不若礼記為得其字音義之正也。」等と述べられている。

(33)『通志堂経解』本は「耄」に作る。『四庫全書』本に従う。

(34) ここは『通志堂経解』本・『四庫全書』本ともに「義」である。原文では、「慶之為耄、儀之為義」(『通志堂経解』本)と両者が連続して現れるから、或いは「慶」の音を表す「羌」字が「義」と誤られ、「儀」の音を表す「莪」字が「耄」と誤られた上、両者の位置が逆転した結果が『通志堂経解』本の記述ではないかとも思うが、想像の域を出ない。

(35) 『直斎書録解題』巻三「韻補」の条。

文献目録

『熊氏経説』(元) 熊朋来撰　通志堂経解(台湾・大通書局拠康熙19年刻本影印、1969中文出版社刊、以下同)所収

『五経説』(元) 熊朋来撰　四庫全書経部五経総義類所収

『宋本韻補』(宋) 呉棫撰　1987中華書局(拠遼寧図書館蔵宋刻本影印刊)

『詩集伝』(宋) 朱熹撰　1961中華書局香港分局

『朱子語類』(宋) 黎靖徳編　王星賢点校　1994中華書局

『項氏家説』(宋) 項安世撰　聚珍版叢書所収

『項氏家説』(宋) 項安世撰　四庫全書珍本叢書別輯所収

『七経小伝』(宋) 劉敞撰　通志堂経解所収

『毛詩古音考』（明）陳第撰　康瑞琮点校　1988中華書局
『声韻考』（清）戴震撰　音韻学叢書（1987台湾・広文書局刊、以下同）所収
『詩古韻表二十二部集説』（清）夏炘撰　音韻学叢書所収
『江氏音学十書』（清）江有誥撰　音韻学叢書所収
『古韻標準』（清）江永撰　1982中華書局（拠咸豊元年陸建瀛覆刻本影印）
『六書音均表』（清）段玉裁撰　1983中華書局（拠『経韻楼叢書』本重印）
『新校索引経典釈文』（唐）陸徳明撰　拠通志堂本影印、黄坤尭校　1988台湾・学海出版社
『五経文字』（唐）張参撰　小学彙函（1998中文出版社刊『古経解彙函・小学彙函・附十種』。以下同）所収
『玉篇』（梁）顧野王撰（宋）陳彭年重修　小学彙函所収
『宋本広韻』（宋）陳彭年等撰　1976台湾・芸文印書館（拠張氏沢堂本影印）
『広韻校本』周祖謨編　1974台湾・世界書局
『広韻校勘記』周祖謨著　1984台湾・世界書局
『宋刻集韻』（宋）丁度等撰　1989中華書局（拠北京図書館蔵宋刻本影印）
『増修互註礼部韻略』（宋）毛晃・毛居正撰　1982八木書店（天理図書館善本叢書）
『附釈文互註礼部韻略』続古逸叢書（1994江蘇広陵古籍刻印社）所収
『等韻五種』1996台湾・芸文印書館
『十三経注疏』（清）阮元校刻本影印、黄侃句読　1990上海古籍出版社
『詩経索引』陳宏天・呂嵐編　1984書目文献出版社
『詩経詞典』（修訂本）向熹編　1997四川人民出版社
『全漢三国南北朝詩』丁仲祜編　1983台湾・芸文印書館
『郡斎読書志・直斎書録解題』（宋）晁公武・（宋）陳振孫撰　1984中文出版社（『直斎書録解題』は清武英殿輯永楽大典本により影印）
『四庫全書総目』1979台湾・芸文印書館
『元史』（明）宋濂等撰　1976中華書局
『史諱挙例』陳垣著　1987台湾・文史哲出版社
『歴代避諱字匯典』王彦坤編　1997中州古籍出版社
『中国古代語言学史』何九盈著　1985河南人民出版社
『中国古代語言学家評伝』吉常宏・王佩増編　1992山東教育出版社
『清代古音学』王力著　1992中華書局
『古音学発微』陳新雄著　1975台湾・文史哲出版社
『古音研究』陳新雄著　1999台湾・五南図書出版
『詩経韻読』王力著　1980上海古籍出版社

『漢語詩律学』王力著『王力文集』第十四巻（1989山東教育出版社）
『漢字古音手冊』郭錫良編　1986北京大学出版社
「上古音分部図説」・「清朝以前の協韻説について」頼惟勤著『頼惟勤著作集Ⅰ　中国音韻論集』（1989汲古書院）
「呉棫所分古韻考」頼江基著『暨南学報　哲学社会科学』1986年第3期
『漢魏晋南北朝韻部演変研究（第一分冊）』羅常培・周祖謨著　1958科学出版社